



長倉先生の故郷探訪記

Shunichi ISHIKAWA 石川俊一 長光会, 元富士フィルム

Kazunori MATSUI 松井和則 長光会, 関東学院大学元学長・教授

私たちは、長倉先生が東京大学をご退官される1年前まで、大学院の学生としてご指導を受けました。当時の私たちにとって、長倉先生はただただ偉大で、仰ぎ見るような畏れ多い存在でした。その一方で、よく人を惹きつける明るい笑顔を見せられ、皆から敬愛される存在であったとも思います。そのような先生の下、恵まれた環境で充実した研究生活を送り、学位取得後はケミストとしてそれぞれの道を歩みました。その後、長い年月が経ちました。以下は、私たちが高齢者になったここ数年の話です。

長倉先生は変わらずご健在で、近年はご自宅近くの高齢者施設でお過ごしでした。そして、弟子たちが手紙などを送ると、大変楽しみにして読んで下さることでした。そこで頭に浮かんだのが、先生の故郷(静岡県沼津市)を訪れ、その付近の写真をお送りしたら喜んで眺めていただけるのではないかというアイデアです。と言うのは、先生のご著書『複眼的思考』ノススメ』の中に、「私は、愛鷹山の麓の寒村にある旧家に生まれました。近くには秀麗な富士山と美しい駿河湾があり、恵まれた環境に育ちました」との記述があり、先生の故郷への強い思いが感じられたからです。

2019年の春、桜が満開の頃に、車で沼津へ出かけました。先生がお生まれになった場所としては、Wikipediaで見た柳沢という地名しか知りませんでした。その近くに至った後、駿河湾の写真を撮るには高台の方が良いと考え、新東名高速道路が通っている付近まで登って行きました。するとカーナビに赤野観音堂(写真1)という名前のお堂が現れました。これは面白そうだと近づいてみたところ、そこはお茶畑が一面に広がる斜面の頂上部に当たり、遠くに駿河湾が美しく眺められる絶景の地でした。何となく、これが長倉先生の原風景かもしれないという気がしました。赤野観音堂は無人の小さいものでしたが、大変趣のある建物でした。そして、何気なく見ていたら、何と驚くべきことに、観音堂の脇に掲示してあった寄付者名簿に「長倉三郎」



写真1 赤野観音堂

という先生の名前を発見したのです！ そばの立札に管理者である廣大寺の名前と電話番号が記されていたので、電話して確認したところ、それはまさに長倉先生ご本人とのことで、しかも、何と先生のご生家がお寺の近くにあるということでした。とても意外な展開に驚きながら、喜び勇んで廣大寺へと向かいました。

廣大寺のご住職は、私たちが先生のためにわざわざここまで来たこと、本当に偶然ここを見つけたことにいたく感心され、かの地の名家である長倉家のことをいろいろ説明して下さいました。さらに、ご親切にも長倉先生のご生家を案内していただきましたが、それは屋根付きの立派な門と広い庭を備えた風格のある家でした。先生のご著書に、子供の頃、よくいたずらをしては、教育に厳しいお母上に蔵に閉じ込められたという記述がありますが、その立派な蔵も健在でした。

充実した長倉先生のご生家訪問後、今度は先生の中学時代の母校(旧制沼津中学校)である沼津東高校へと向かいました。そこには、沼津東高校が生んだ3人の文化勲章受章者(長倉先生、井上靖氏、大岡信氏)の自筆の書を彫り込んだ石碑(写真2)が建っています。先生の碑には、若人への励ましの言葉『二十世紀は若人の知的創造に期待する時代 柔軟な思考と逞しい気力で独自の道を拓き 新しい文化の創造に貢献して下さい』が記されていました。



写真2 沼津東高校の長倉三郎先生の石碑



写真3 長倉三郎先生ご生家の門と背後の山

これらの、長倉先生の故郷探訪の写真をソフトカバーのフォトブックにして、先生へとお送りしました。喜んでいただけるかどうか心配していましたが、日頃先生のお世話をされている姪御さんによると、先生は大変気に入って、ベッドにも持ち込んで楽しんでいらっしやるとのことでした。とても嬉しくて感激しました。そして、その少し後、私たちが先生のもとを訪れ、先生の故郷探訪のことなどをお話することになりました。

久しぶりにお会いた先生は、昔ながらのにこやかな笑顔でしたが、以前にも増して非常に柔かな表情であることに強い印象を受けました。先生はフォトブックを手に取り、「これは本当に良く撮れている」とほめて下さいました。またそのとき、部屋に飾っていただけのように、A4に引き伸ばしたご生家の門と背後の山が写った写真(写真3)をお持ちしたのですが、それを見て「うーん、これは良い写真だ」ととても懐かしそうでした。やはり先生の故郷への思いは大変強いものなのだと再認識しました。「昔は門の屋根がカーブを描いているのが変だと思っていたが、今はこれも良いと思うようになった。このカーベチャ (curvature, 曲率) がね」などと突然英語の専門用語が飛び出したりして、和やかに話が弾みました。「中学校へはどうやって通学しておられたのですか?」とお聞きしたら、「自転車か、東海道線の原駅まで歩いてそこから電車」とのことでした。旧制沼津中学校は、先生の家からは相当な距離(二里)があり、高低差もかなりなものです。そのようなタフな通学によって、ご長寿の基礎となる

頑健なお体を得られたのかもしれませんが。その後も楽しい話が続き、満ち足りた思いでお別れしました。

その1年後に、先生は99歳で旅立たれました。100歳を迎えられるのが当然のように思っておりましたので、とても驚きました。敬愛する長倉先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。なお、先生は静岡県沼津市柳沢702 廣大寺で永遠の眠りにつかれています。

© 2021 The Chemical Society of Japan



長倉先生写真館



長倉先生墓前(廣大寺, 提供: 長倉正彦様)